

標準外科学 第12版

北島政樹 監修

加藤治文, 畠山勝義, 北野正剛 編

＜書評者＞ 稲田英一（順天堂大学主任教授・麻酔科学）

最近は外科志望の医師が減少しているといわれている。外科医を増やすためには、まず実技教育を含め生き生きと充実した学生教育を行う必要がある。一口に外科といっても、消化器外科、呼吸器外科、心臓外科、乳腺外科、小児外科などその領域は広い。外科領域の臨床だけでなく、外科学に關係する遺伝子学や免疫学などを含めた基礎教育など幅広い教育も必要となってくる。さらに、臓器移植、遺伝子治療、新薬による治療などに関する倫理的な教育も必要となってくる。このような幅広い要請に十分に応える外科の優れた学生向け教科書が必要なことは言うまでもない。『標準外科学』は今回で第12版となり、1976年の初版発行から30余年が過ぎた「標準」と付いていることに恥じないロングセラーである。現在、外科学の一線で活躍されている先生方の多くも使用された教科書であると思う。本書はその表紙から紙面まで大きく変わっている。真っ白な表紙は、刷新された本書の意気込みや潔さが象徴されている気がする。

評者は麻酔科医であり、外科医ではない。良書であることを知っているので気軽に書評を引き受けたものの、麻酔科医である私が適任かどうかについて悩むことと

なった。そこで、学生になった気持ちで本書を読むこととした。教科書はまず読み応えがなくてはならない。単に調べるため、あるいは記憶するための本は、教科書とは呼べないであろう。ざっと章だてを眺めてみると、総論には、歴史、外科侵襲の病態生理、ショック、外科診断法、無菌法、基本外科手術手技や処置、出血、止血、輸血、救急外科、急性腹症、損傷、外科損傷、腫瘍といった章が並んでいる。さらに、近年学問的進歩が著しく、臨床的にも応用が進んでいる免疫、分子生物学、臓器移植、人工臓器、再生医学、リスクマネジメントといった章が続く。次に各論では、顔面、口腔、頸部、乳腺、心臓、血管、消化管、肝臓といった部位別、臓器別の章が続いている。老人外科、小児外科は別立ての章となっている。

歴史と医療への貢献の章では、外科専門医制度にも触れられており、学生の将来への指針となるだろう。外科的侵襲の病態生理では神経内分泌反応に加え、免疫系の変化や炎症、遺伝子多型にも触れている。ショックの章では、液性因子に対する対策について述べられており、前章との基礎知識と結び付く。外科的診断法や手術手技は図や写真も多く実践的となっており、OSCE対策としても

役立つであろう。

各論においては、解剖、生理、検査を含む診断法、病態、診断、治療、予後というように順序立てて述べられている。このように基礎から書き起こすことにより、相互に結びついた系統的な知識体系となり、それに基づいた理論的思考を促すことになる。本文は重要事項を赤文字ゴシックとしたり、アンダーラインを付けるなどわかりやすくなっている。とかく平板になりがちな教科書の記述がこれらの工夫により、読みやすく、また記憶しやすいものになっている。試験前の学習にも便利であろう。図表や写真も多く、理解や知識の整理を促進するようになっている。写真も白黒のものは鮮明であり、カラー写真のものも実際に近い色となっており、臨場感がある。心臓手術のところでは、QRコードを用いて術中映像が閲覧できるようにになっている。本文695ページという中に、これらの事項を含めた監修者と編者の努力に敬服する。

本書は、外科学の学生教育の現在のスタンダードを示すと同時に、未来への展望も示すものである。本書は医学部学生を主たる対象としたものであるが、実地医家にとっても、外科学全般を今一度振り返りリフレッシュするのに有用な書と考えられる。

●B5 頁784 2010年
定価8,925円
(本体8,500円+税5%)
[ISBN978-4-260-00865-5]
医学書院刊